

winter
2006
Vol. 2

ナラヨム



みる奈良

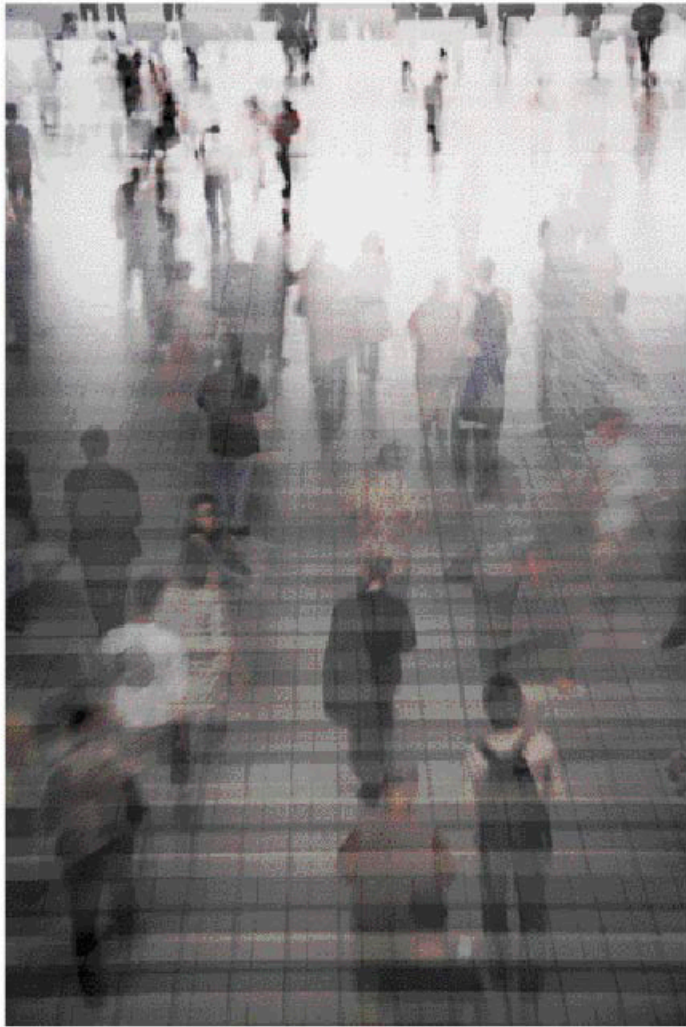
ナラヨム 第2号 2006年1月31日発行 発行●(株)南都銀行／(株)明新社 企画編集●奈良県立図書館情報館 編集協力●(株)清光奈良ラベン



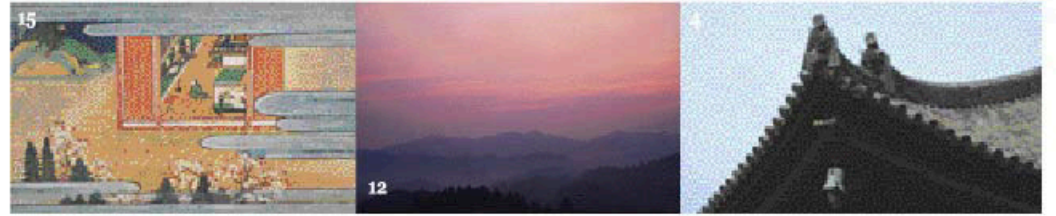
若い奈良

2

1300年の伝統をもつ奈良。
長い歴史に新たなページを創る
若い力があります。
新しい風の“今”をお伝えします。



untitled (P-31) (奈良県立図書館開館ポスター、近鉄電車内広告の原画)



ナラヲヨム Vol.2

CONTENTS

- 1 若い奈良
フォトアーティスト 鯉江真紀子
- 4 **特集** みる奈良
鬼師がみる 小林章男
「手塚治虫の奈良」をみる 渡邊圭紹
企業人がみる 乾昌弘
外国人がみる カルメン・サブナル
- 10 第2回 図書館ツア―
ふるさとコーナー&貴重書庫
- 11 図書館トピックス
開館記念講演会
- 12 図書館がよむ
かぎろひ
奈良墨
奈良晒
青衣女人
- 16 編集後記



untitled (P-17)

「見る」ということ

もうすぐ受験シーズンがやってくる。そして、ドキドキの合格発表。その合否によって、いつもの見慣れた光景がキラキラと美しく輝いたり、またはどんよりとくすんで目にうつる経験は、誰にでもあることだろう。でも、同じものをみているのになぜ？

医学によると、人間は目を通して、じつは「脳」でみているらしい。脳と言われても、「今、頭のこの部分が反応しました。」とはっきりわからないが、どうもそうらしい。

ふうん、そうか。それで違ってみえるのだな。

それならばこれからの人生、数%しか使われていないという使用中の部分ではなく、残りの眠っている脳で世の中をみてみたいものだ。

情報や概念のない、そう、生まれたばかりの赤ちゃんのようなまなざしで。ちょっとがんばって、そういうところに心の焦点を合わせるようにしたらどうだろう。はじめて地球にやってきた宇宙人の気持ちもすこしは味わえるかしら。

まあ少なくとも、ささいな苦しみでぐるぐる回っているところから解放されることを期待しつつ、新たな神経細胞の末端を未使用の部分へとすくすく育てていく。そんな様子を想像してみよう。

好きな音楽、人、気持ちのよい場所、匂い(香り)などに
出逢えたときの嬉しさといったら！
その感動は、新たな細胞をつくり始める兆しに満ちている。
人間の集中力によって伸ばされる力は、スゴイ。
その起爆剤は日常生活の中に転がっている。

「心の焦点」を変えるだけで、人の目には同じものが違うように見えてくる。
表面ではなく、そのさらに奥へ。
常に、くもることのない新鮮な気持ちで。
この世界を『見て』いきたい。

M. Koie



◆ フォトアーティスト
鯉江真紀子

MAKIKO KOIE

1969年 京都市生まれ
1993年 京都市立芸術大学卒業
2003年～京都市立芸術大学油画研究室非常勤講師
奈良市在住

■ 近年のおもな展覧会

2003年 "photoGENesis: Opus 2"
サンタバーバラ美術館(カリフォルニア)
"Genomic Issue(s): Art and Science"
The Graduate Center of the City
University of New York (ニューヨーク)
"City_net Asia 2003" ソウル美術館(ソウル)
2004年 「モダンマスターズ&コレクション展」
金沢21世紀美術館(金沢)
2005年 「広東写真ビエンナーレ」広東美術館(広東)
「VOCA展」2001, 2005
上野の森美術館(東京)など。

個展(ツアイト・フォト・サロン)多数。

■ パブリックコレクション

大原美術館 金沢21世紀美術館
広東美術館 東京都写真美術館

■ 受賞

2005年 VOCA展(上野の森美術館) 大原美術館賞
京都市芸術新人賞

■ 掲載紙

ニューヨークタイムズ、朝日新聞、読売新聞、産経新聞、
流行通信、婦人公論、ぴあ、STUDIO VOICE、美術手帖、
美庵、アサヒカメラ、リビングデザイン、美術の窓、他



untitled (P-28)

特集

みる奈良

NARA

さまざまな人やものが往来する奈良。
そのまなざしの向こうに、
隠れた奈良の姿があります。

鬼師がみる

小林章男

鬼瓦からみた奈良の瓦

親の心子知らず、とこ親が苦勞して得た技術などは、案外子孫には伝わらぬ技が多く、大切な技もその人一代で姿を消してしまうことが数多く見られるのが世の常である。この奈良には、研鑽をなした技で、最高の意匠を凝らした寺院の御堂が、千数百年、数百年、いまだ数多く立派に残されてゆるといふ幸運に恵まれた土地柄である。

昔時の工匠が苦勞されて、二十一世紀の現在まで立派にその当時の姿を留めてくれているが、それは親から子、師匠から弟子にと直接に受け継ぎ受け継がれて、次の時代の子や弟子に伝えられて来たもののみではない。長い歴史を振り返ってみると、おおまかには、古代と中世、また中世とその末期、そして近世へと、その世相と技術の変遷によって、工匠の技もその読み取り方がいろいろ違ってきているはずである。それは屋根の棟端を飾る瓦のデザインひとつにも、その土地、そのときの世相が大きく反映されているのである。

棟端飾瓦(鬼面瓦)が最初に造られたのは、白鳳時代であるが、それから

ら弟子にと直接に受け継ぎ受け継がれて、次の時代の子や弟子に伝えられて来たもののみではない。長い歴史を振り返ってみると、おおまかには、古代と中世、また中世とその末期、そして近世へと、その世相と技術の変遷によって、工匠の技もその読み取り方がいろいろ違ってきているはずである。それは屋根の棟端を飾る瓦のデザインひとつにも、その土地、そのときの世相が大きく反映されているのである。

棟端飾瓦(鬼面瓦)が最初に造られたのは、白鳳時代であるが、それから

鎌倉時代のはじめ頃までの六百年あまり、棟端飾瓦は、仏師等により彫られた木型を用いて造られ、現存するものを見ると、秀作が多いが、それらは殆どが平面的なレリーフ様のものであった。

ところが、鎌倉時代の十三世紀中頃になると、何を想像してか、その棟端飾瓦に肉厚の面相が飾り付けられるようになるのである。その発想の原点は分らないが、きわめて立体的な面相が飾り付けられるようになるのである。宗教観の変化によるものか、世相の流れでそうなったものか、十



昔時の工匠が苦勞されて、二十一世紀の現在まで立派にその当時の姿を留めてくれているが、それは親から子、師匠から



a. 不退寺南門棟鬼瓦模 b. 雷作鬼瓦(南北朝時代の瓦をモデルに)
c. 鬼瓦製作中の筆者 d. 工業所参考室にて



興福寺東金堂棟端飾瓦(鬼瓦)▶
協力:興福寺

五世紀、室町時代になると、それらは今日ひろく呼ばれている鬼瓦となつて造られていくのである。当時の師匠たちは、そのような変化をそんな風に考えてもいなかったであろう。面相の瓦が、突然変化し、それが当たり前となり、五百年もの歳月を経て、益々その工作工程が進歩し、面相も変貌しながら造り続けられてきたのである。

鬼面瓦は、鬼として忌み嫌われてきた姿を、鬼としてきわめて立体的な顔面に造り上げられてきたのである。鬼は、その頃から強いものとして、また家屋、財宝を護るものとして、棟端に飾られたようである。

その意匠の変化は、立体的な彫刻のようになって行くので、それを手掛けた瓦工の細工人たちの創作意欲を駆り立て、目

線の太さやその方向など意匠が凝らされた。また時代の好みや地域の気候風土などにも影響されながら、面相の肉付きが考えられた。さらに施主の好みや棟梁の指導によりながら個性豊かな鬼瓦が造られてきたのである。それらが今日、全国各地の御堂をはじめとする建造物の屋根に、数百年と棟端に飾り付けられてきた瓦(鬼瓦)なのである。これらは、ある時、ある場所での指導的立場に立った職人が、先人の作意を汲んで、指導者の指示に従い造り続けられてきたもので、突然、今そこに飛び出たものではない。伝承により教えられただけのものでもない。しかし、ある時、そこに新たな作品が生まれ、それが時代を表わす作品となるのである。地方色が富む、個性豊かな鬼瓦が

そこここに顔を出している。民家の鬼瓦にも珍しい姿の鬼が見られるが、特に奈良の寺院堂塔の屋根瓦の棟端飾瓦には、その技を競うかのように独創性に富んだ鬼瓦を数多く見ることが出来る。それらの鬼瓦は、春夏秋冬、季節により、また日々その時々太陽の光線により、変化に富んだ面相を見せながら、棟端より下界を見下ろしているのである。

棟端にある鬼を望むとき、昔の造形を通して、鬼たちがその時々世相を語りかけるかのようなある。翻って、その鬼たちが棟端から見続けてきた奈良の姿の移り変わりを瓦を望むわれわれに語りかけてくるようでもある。

Akio Kobayashi



- 大正10年12月7日生まれ。
昭和13年 7月より 家業「瓦字」の瓦製造業に就業
幾多の国宝、重要文化財建造物の屋根瓦の製造および修理工事に就く。
昭和56年 4月 奈良県高等職業訓練校校長に就任
昭和57年 11月 卓越した技能者「現代の名工」として労働大臣表彰を受ける。
昭和59年 3月 株式会社 瓦字工業所代表取締役役に就任
7月 優れた伝統技能者として、ポーク特賞を受賞
昭和63年 3月 選定保存技術保持者として文化庁より選定される。
平成 3年 2月 「日本鬼師の会」会長に就任
3月 「日本伝統瓦技術保存会」設立、会長に就任
4月 「勲六等瑞宝章」授章
平成 7年 4月 「日本鬼師の会」会長を辞任し、名誉会長に就任
平成14年 4月 株式会社 瓦字工業所会長に就任

●主な著書
「鬼瓦」(大蔵経済出版、1981)、「続鬼瓦」(同、1991)、「鬼・鬼瓦」(INAX出版、1982中村光行共著)、「生きている鬼瓦」(石州瓦販売協業組合、1985(屋根蔵書:4))、「獅子口を探る」(1995)、「瓦:歴史とデザイン」(淡文社、2001、山田脩二共著)

「手塚治虫の奈良」をみる

株式会社トータルメディア開発研究所
プロデューサー 渡邊圭紹

「手塚治虫の奈良」展をプロデュースする



▲「火の鳥」大型タペストリー

面白いことが分かってきたことである。15歳のときは太平洋戦争真っただなか。そのとき生命の尊さ、生きる喜びを強く感じたそう。30歳になり奈良県立医科大学第二研究室に入る。漫画を仕事として行き詰まりかけていたころであり、阪大医学時代の友と偶然出会った事がきっかけで恩師と再会し医学博士号を取得するまでになる。またこの時期にも飛鳥の古代遺跡をみていたそう。そして45歳、「ブラックジャック」連載開始。46歳の時には奈良の古代遺跡にもかかわる。「三つ目がとおる」を連載。偶然か必然か、人生の起承・転・結が奈良を舞台にくりひろげられたようにも感じられる。

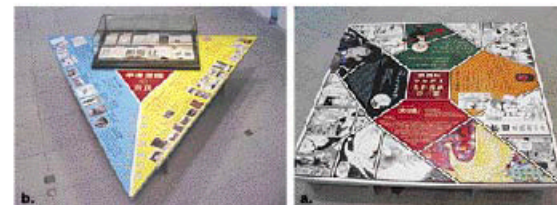


■ Keisuke Watanabe

1973年 三重県生まれ
1997年3月 大阪芸術大学芸術学部芸術計画学科卒業
4月 株式会社トータルメディア開発研究所入社

※開館記念「手塚治虫の奈良」展
H17・11/3～H18・1/19(終了)

事柄が時間の渦の中で関係づけられ、漫画家手塚治虫の転機と基盤を創つたように思えてくる。つまり奈良は、漫画家手塚治虫が面白いだけではない、漫画を描き続けるための一部として、古代から未来へ、生死の尊さをテーマに、よりリアルな作品を世に残すきっかけを与えた必然なところとなったように思われてならない。



a. 作品解説テーブル
b. 「手塚治虫の奈良」解説テーブル

今回の企画展のねらいは、手塚治虫と奈良との関係を知っていただくことであつた。さらには観ていただいた皆様に奈良を顧みるきっかけを感じていただくことであつた。

手塚治虫と奈良との関係をどう伝えるべきか。企画を行うためには情報の収集、分析がまず必要である。当初より分かっていたことでもあるが、奈良との関係を象徴する事柄は2つある。医学博士号取得と漫画に出てくる古代の遺跡とその舞台であつた。ただ、彼の生活が奈良に密着していたわけではない。生まれは大阪の豊中市。育った環境は宝塚、大阪。仕事は東京。途中、戦争を経験し医者になりたいとも思ひ阪大医学で学んだそう。しかし生涯を通じて手塚治虫は漫画を描き続けた。

趣味を仕事へ。生まれて4歳で絵を描き始め、小学校2年生で初めて漫画を描き、地学や歴史に興味を持ち昆虫図鑑や動物図鑑を手作りで作成。そんなことを調べながら驚いたのだが、幼少の頃からいつ、何処で、誰と何をしていたのか、すべて分かってくる。それは架空のものではなく、実物品等が残っているのだ。手塚治虫の人間性なのか、両親からの影響であつたのか。おそらく両方であろう。いたるところに様々なカタチでかなり多くのものが残されている。羨ましい限りである。

また、手塚治虫は生涯を60年で閉じている。60年は長いかわいかな。私は現在32歳。ちょうど半分である。私が着眼したのは手塚治虫の生涯を概ね4つに等分することが出来、奈良とのかかわりで

手塚治虫年表円型テーブル▶



企業人がみる

(株)明新社
代表取締役社長
乾 昌弘



新しい“奈良”の発信をめざして

弊社は一昨年初創業130周年を迎えた際、地域の方々に長きにわたりお育ていただいた感謝の気持ちを今までもよりさらに持ち、今後は「企業活動を通じた地域貢献活動」をより積極的に行っていく方針を掲げたわけですが、この「ナラヨム」の発刊はまさしくその一環であります。折しも奈良県は、西暦2010年に遷都1300年という記念すべき年を迎えます。日本の文化・歴史の発祥の地として、新たな魅力を県内のみならず



■ Masahiro Inui

2004年、NPO法人なら元気もんプロジェクト推進会議を設立。同理事長に就任し、奈良県より奈良2010年塾の運営を委託される。87年(社)奈良青年会議所入会、95年同理事長、00年(社)日本青年会議所近畿地区担当常任理事、近畿地区協議会会長、01・03・04年NPO法人なら燈花会の専務理事、(株)明新社代表取締役社長

ず、世界の情報の受発信基地とならんとすることを目指し建設された県立図書館のソフト・ハードを冊子という媒体によって広く発信していきたいと考えています。図書館というと学生達を利用する施設という概念がありますが、この図書館情報は従来の固定概念を一掃する、大人の図書館でもあります。さらには、図書だけではなく、最新のIT機器も設置され、瞬時にして世界の歴史・動向を見ることができ、ますます、おそらく130

0年前も、情報伝達のスピードは今とは格段に違うとはいえ、世の中の全ての情報がこの奈良に集まり、この奈良から情報が発信されていたのだと思うと、図書館に口マンすら感じます。多くの価値ある歴史的建造物・彫刻が存在する奈良が、「世界の中の奈良」と言われて久しいのですが、県民はそう感じている、残念ながらそれを広く発信していく術が無かったように思えます。しかし、図書館情報の開館によって、その発信はより現実的なものになってきたのではないのでしょうか。ぜひとも多くの方々がこの施設を利用して、情報の収集及び発信をしてくださることを、折念いたしますと共に、弊社もその一翼を担えるよう、一層努めてまいります。

初めて日本へ来たとき

にワンダーランドのような国を発見すると期待しました。その理由、奈良は日本の古い都で、私は神話の研究をするということです。それで、はじめは奈良を歩きながらずっと夢で見た奇跡を待ちました。けれども、一年経って、アメリカの映画のような天啓はなく、大仏様も話してくれませんでした。しかし、奈良にほかの奇跡が存在することをわかるようになりましな。

奈良の雨の日。雨だから奈良の写真博物館へ行って、その写真に夢中になってから、外へでると春日大社の近くで不思議な世界を見つけました。少し暗い道を歩いてから、藤の花からポタリポタリと落ちる滴が神の涙のように見えました。奈良には世

界の一番きれいな花があると思います。たぶん日本の光も特別だろうが、奈良の花はどこよりも魅力的で、ルーマニアの有名な作家の幻想小説を連想させました：『天国のユリの陰で』。奈良の香り。香りはいつも色々のことを思い出させるので、私にとつては非常に大事です。それで、「奈良」と言うと、すぐに興福寺の線香と奈良町の小さい店の香りが感じることができると

んなところでも特徴のある匂いがすると思います。奈良の匂いは、紫の日暮れ、真っ赤な紅葉、浮見堂と多色のコイ、小さい伝統的な店と青い布の匂いです。私の大好きな奈良について多くのことを言いたいですが、自分ので、通じるかどうかかわりません。それで、最後に言いたい：奈良は世界が一番美しいところです。

■ Carmen Sapunaru

ルーマニア生まれ。2000年10月～2001年8月まで、消費留学生として奈良教育大学に留学。帰国後、大学で英語、日本語を教える。2004年4月より大阪外国語大学大学院言語社会博士前期課程で、日本文化、特に日本の神話を研究している。



外国人がみる

— カルメン・サブナル —

世界が一番美しいところ



第1回記念講演会 開館記念講演会

平成17年11月26日(土)
図書館にさだまささんがかけつけてくださいました。



講演会申し込みは3千人を超え、倍率10倍以上という反響でした。講演はまず、歴史地理学者でもある当館館長千田稔が「お隣は藤原仲麻呂邸」と題して講演し、図書館は平城宮のすぐ南に位置し、この場所が奈良時代に高貴な場所であったことを地図や写真で紹介しました。そんな図書館で、情報学、情報

発信することに一層魅力を感じていただけたことと思います。このあと、さだまささんが自身の図書館や図書に対する思いをいろいろなエピソードを交えて語ってくださいました。そのなかのひとつを紹介します。「学生時代、将来について悩んだ時、本を読みまくった。哲学書も読んだ。でも本は直接的に自分への解決が書いてあるわけじゃない。次に自分の不安な思いなんかを模造紙に書き出した。毎日、二週間くらいして解決しているものがあれば線で消していく。これを繰り返して、最後に残ったものから自分の本当の悩みが見えてきて、それについて散々考えた末、迷いの迷路から抜け出せた。この時は無駄に本を読んだと思っただけで無駄なものはない。本の中の

一節や、物語の根っこにあるものに触発されて生きてきた。」さだまさんは、「本は一冊読めば一冊で終わらないはず。わからない言葉なんかがでてくるとまた別の本や、足で稼ぐで知っていくという、芋づる式の楽しみがある。」とも語っておられました。また、当館のことを「いろんな情報をあつめ、そして発信することはとても奈良らしい」とも。講演参加の募集期間中に、「歌手のさだまささんに「歌手・さだまささんですすよね」という問い合わせがあり、まさか公立図書館にさだまささんがおられるとは、とすぐに想像できなかつた方もいらっしゃるのではないでしょうか、図書館は、今までの図書館とは違う、想像、創造が膨らむ場所であることを感じていただけたのではないのでしょうか。



貴重書庫

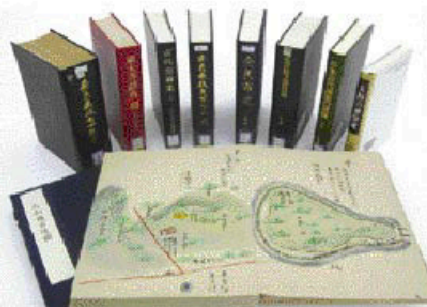
資料的・文化的に価値が高いと同時に資料の劣化を防ぐ必要のある資料については、保存環境の整った貴重書庫に配置しています。

貴重書庫内は奈良県産の杉材を使用しており書架も木製の書架を組み、資料保存に適した温度(21.6度)と湿度(50パーセント)により資料管理を行なっています。

保存している資料は江戸期から明治初期までの和古書、明治期から昭和前期にかけての地方紙を含む新聞資料、また古文書や絵図、各種の記録資料など地域資料としての歴史資料など合わせて3万4千点の資料を保存しています。

資料は保存とともに積極的な提供も行なうため、資料の書誌データベースを作成しホームページや館内の利用者用閲覧端末により検索が可能になっています。

また、原資料を永く保存し次世代に引き継ぐため、資料のマイクロ化やデジタル化も進めており、地域資料のうち絵図や古地図、「今西文庫」や「藤田文庫」といった写本集や手写記録類はデジタルの画像資料としてホームページでご覧いただくことができます。



ふるさとコーナー 3F

県立図書館の機能の一つとして県域に関して記述された資料を網羅的に収集し、提供することがあげられます。図書館ではその役割を踏まえ閲覧スペース上で表現するために、3階北西部分の専門資料スペースの一角に「ふるさとコーナー」を設けて、関係する地域資料を配架しています。

このコーナーには現在奈良県に関する図書や雑誌、新聞スクラップなど4万点の資料が配架されています。

資料は2つの体系でまとめられて配架されています。まず西側部分は一般的な地域資料を主題順にNDC(日本十進分類法)で分類した図書や雑誌を並べています。東側部分には県政資料を「財政」や「福祉」といった件名ごとにまとめて配架し、市町村関係の資料については市、郡単位で配架しています。また奈良県の地域的特色でもある古代を中心とする古墳や社寺などの建造物、工芸・美術などの文化財に関する調査報告書や修理報告書もまとめて配架しています。

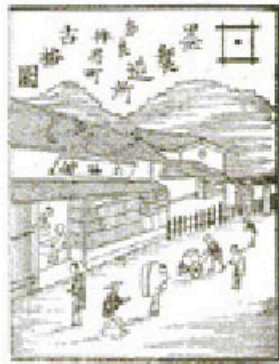
これにより所蔵する資料をより体系的にまとまりのある資料群として書架上に配架し、各種の資料検索のためのツールの整備や書庫内の古文書・絵図、和古書などの歴史資料の活用と併せて、利用者の方々が利用しやすく、資料要求や各種の質問に対しても的確に応えていくことを目指しています。

地域の歴史や文化から身近な生活情報まで、他では目にすることができにくいオリジナルの資料の集積とも言える「ふるさとコーナー」を活用していただくことによって、新たな知識・文化の創造やビジネスチャンスが生まれていくための継続した情報提供の場でありたいと思っています。

第2回



館内施設みてある記



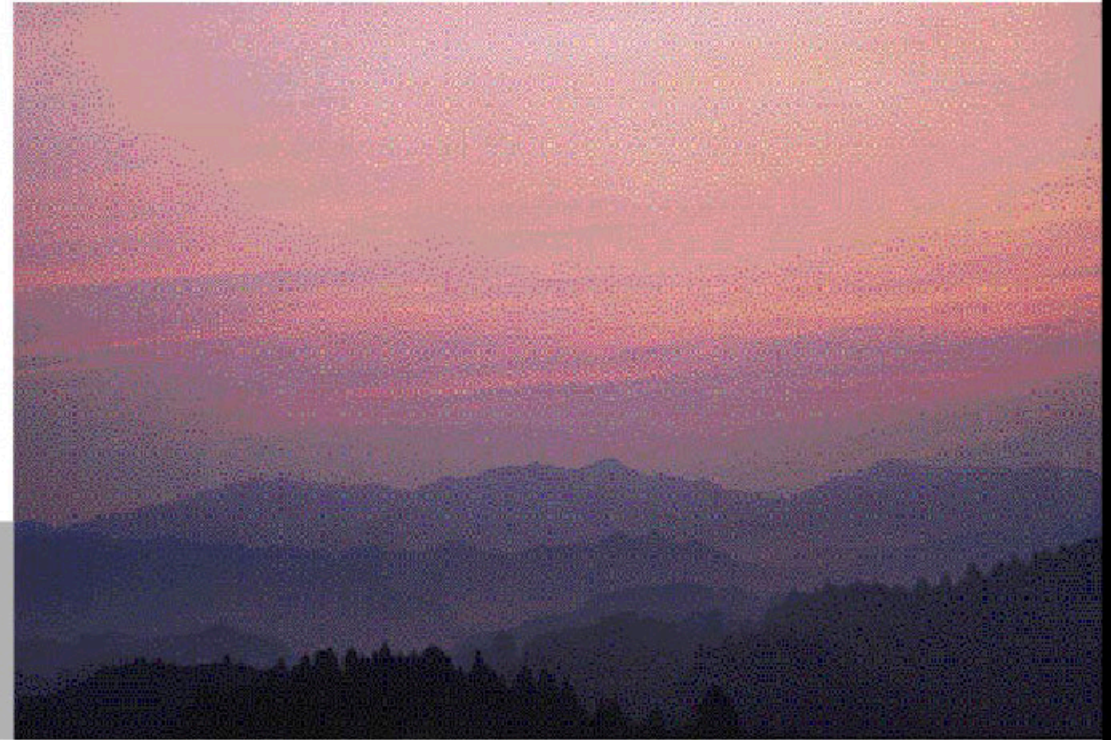
当館所蔵資料より
『大和名勝商家案内記』奈良の部

その昔南都油煙墨ともよばれ全国に知れわたった奈良墨。植物油を燃やして煤を採取する製法を採ったことにより、従来松脂から煤を採ってつくっていた墨（松煙墨）とは品質的に格段に優れた油煙墨がつくられるようになりました。

墨造りは、原料である膠の性質により10月から4月にかけての寒期に行われます。煤と膠を混合させたものを練り、成型、乾燥などの工程を経たのち、磨いたり彩色を施すなどして完成します。

この奈良墨は粒子の細かさから擦り心地がよく、また、紙に落とすときの墨の黒色の深さや艶など独特の美しさを持ちます。現在でも全国シェアの大半を占める奈良の代表的な伝統産業のひとつでもあります。

奈良墨



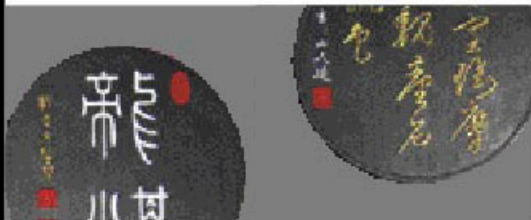
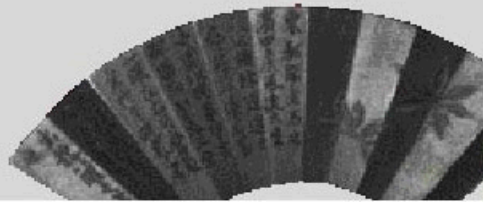
写真提供：大宇陀町商工会青年部 部長 宮奥淳可

かぎろひ

柿本人麻呂の「東の野にかぎろひの立つ見えてかへり見すれば月かたぶきぬ」の歌で有名なかぎろひですが、諸説があるものの広辞苑では「東の空に日の出前にさしそめる光のこと」と説明されています。

さて、このかぎろひですが、皆さんはご覧になったことがあるでしょうか。毎年、大宇陀町のかぎろひの丘万葉公園で人麻呂がこの歌を詠んだされる旧暦11月17日早朝に「かぎろひを観る会」が行われていますが、気象条件が整っていないとみられない為この日にみられることは稀のようです。あいにく私も見たことはないのですが、幸いウェブページを検索すれば何点かの写真をみる事ができます。写真によると茜色、紫がかった白、オレンジ色、薔薇色のような様々な色に見えるようです。

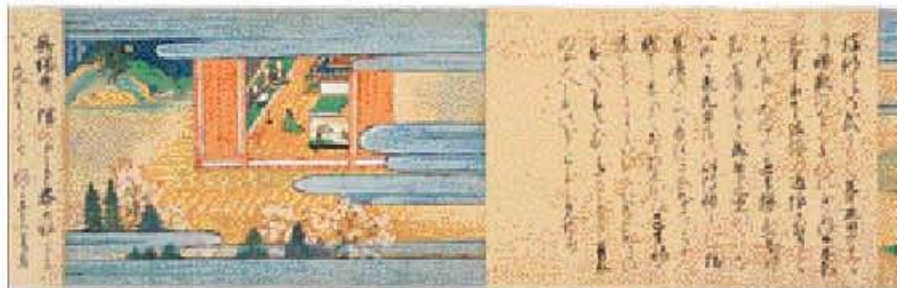
万葉集の時代から下って、正倉院の宝物にもみられるように、奈良時代には奈良はシルクロードの終点となりますが、シルクロードの始点のローマの神話でいえばかぎろひは曙の女神オーロラの馬車からさしそめる薔薇色の光といったところでしょうか。かぎろひの色は、様々な奈良の色のひとつといえるでしょう。そのイメージは、万葉集からつらなりつつ、より広い世界にひろがって行きます。



写真提供：株式会社 古梅園

しょうえのによにん

青衣女人



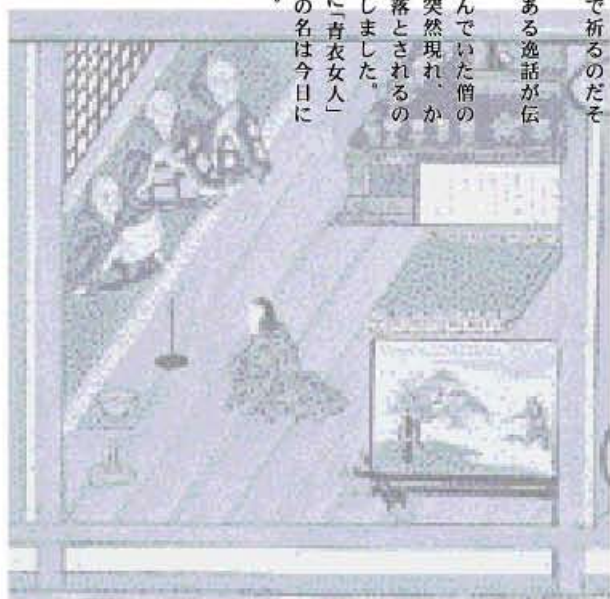
“お水取りが終わると春がくる”
 一般にお水取りとよばれる東大寺二月堂の修二会は、奈良に春をよぶ伝統行事です。14日間にわたる修二会本行のうち第5日および12日の夜には「過去帳の読み上げ」が行われます。

過去帳には聖武天皇を筆頭に、東大寺にゆかりの深い人々の名前が身分に関わらず列記されていて、一同が等しく悟りを成すことができるよう名前を讀んで祈るののです。

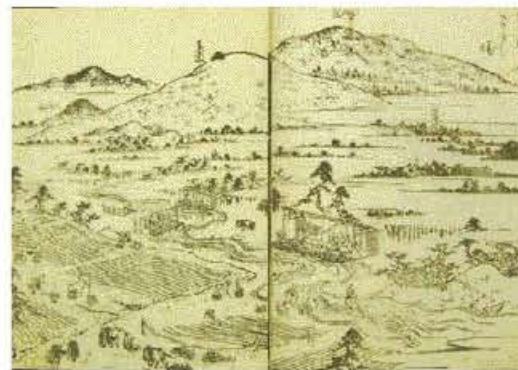
この過去帳の読み上げにはある逸話が伝えられています。

鎌倉時代の初期、これを読んでいた僧の前に青色の衣を纏った女性が突然現れ、か細い声で「なぜ私の名を讀み落とされるのですか」と言い残し、姿を消しました。

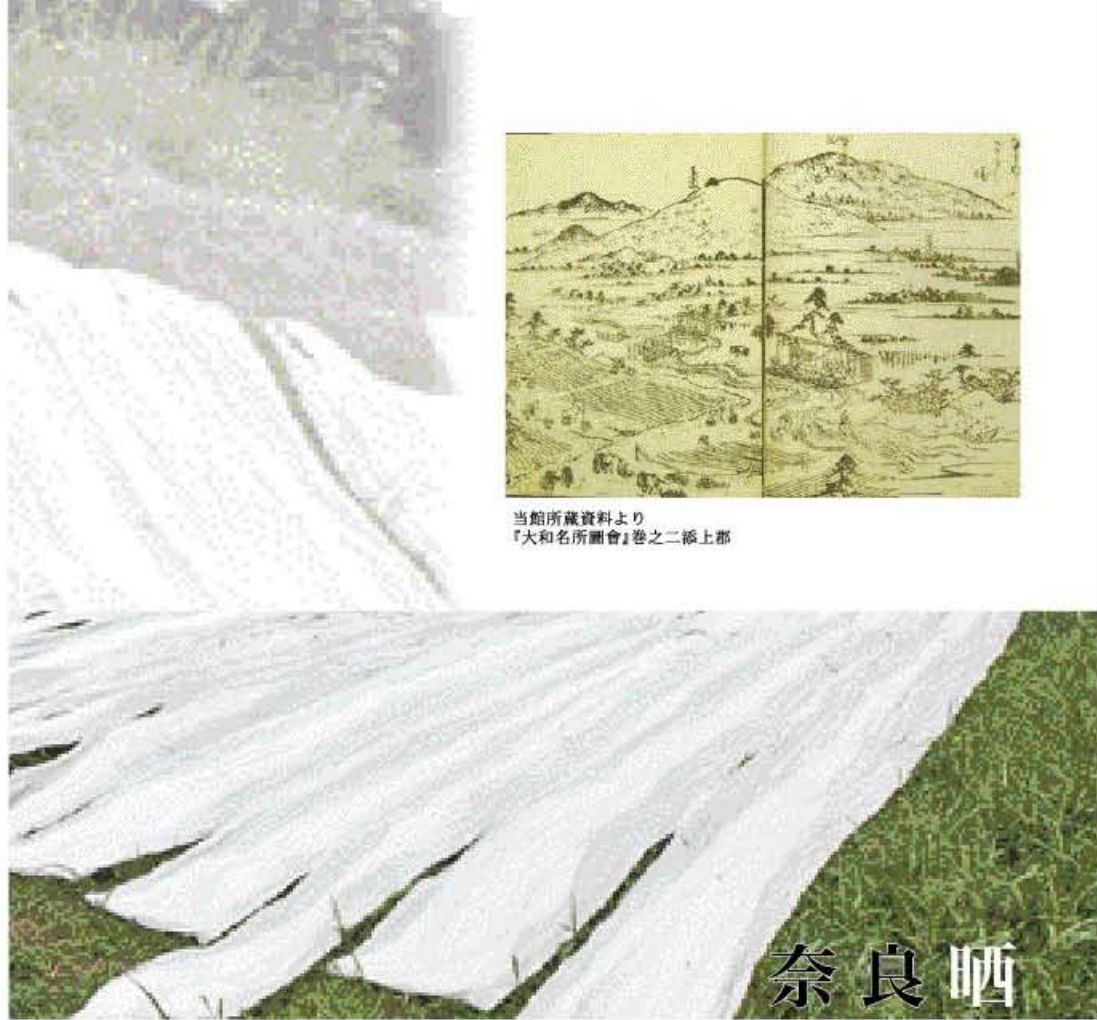
僧はその衣の色からとっさに「青衣女人」と名付けて読み加え、以後その名は今日に至るまで読み継がれています。



『二月堂縁起』下巻 第二段より
写真提供：奈良国立博物館
所 蔵：東大寺



当館所蔵資料より
『大和名所圖會』巻之二 上郡



奈良晒

ならさらし

天日にさらした布
写真提供：奈良県立民俗博物館

奈良の名産品のひとつである奈良晒は、苧麻、大麻を原料とした麻織物で、その生産は江戸時代に隆盛を極めました。当時は武士や裕福な商人らの礼服などに用いられていました。

この奈良晒は、糸作り、織り、晒しの三工程を経て完成します。

織り上がったばかりの生地、生平は淡い茶色をしており、これを水に晒し天日で干すことで真っ白い布になります。

布を晒す様子は「大和名所図會」にも描かれています。

最盛期には佐保川、吉城川などでもこのような光景がみられたようです。

新しい年を迎えたと思つたら、もう二月！。年々、日が経つのが早く感じるようになっていく。学生のときは、一年が長く感じられていたのに最近では、台風のような忙しさ。嬉しくもあり、悲しくもある。しかし、忙しいながらも少し若いときには、感じられなかった四季の移り変わりを楽しめるようになっていく。

冬に咲く「寒牡丹」は、二季咲きの日本独自の品種だそう。今年こそ、我が家の相棒と葉囲いをした姿の「寒牡丹」を石光寺へ見に行こう。

また、本誌の中で紹介している「青衣女人」は、お水取りの本行のなかで、「過去帳の読み上げ」というものがあり、その読み上げの際に出てきたとされる伝説の女性である。そんな豆知識を持って、お水取りを観に出掛けるのも楽しそう。

お水取りが終わると奈良に春が訪れるという。また、春になれば、どこに行こうかと考えながら、我が家の冬は過ぎていく。

(三)

ナラワヨム 第2号

平成18年1月31日発行

発行者：(株)南都銀行／(株)明新社
企画編集：奈良県立図書館情報館

編集協力：(株)読売奈良ライフ
題字：紫舟

本誌の無断複写・複製・転載を禁じます。

7色印刷・イベント・IT・セールスプロモーション・パーティ



株式会社 明新社

MEISHINSHA

- 本社 630-8141 奈良市南宮崎町3丁目46番地
TEL 0742-63-0661(代) FAX 0742-63-0660
- 大阪総機所 543-0001 大阪市天王寺区上本町8丁目8番1号
TEL 06-8771-4501(代) FAX 06-8773-0432
- もちいどの店 630-6217 奈良市橋本町36番地
TEL 0742-23-3131(代) FAX 0742-26-0093

URL <http://www.meishin.co.jp>
E-Mail info@meishin.co.jp



南都銀行はまほろばの心を
未来へと伝えます。

どんなに生活が変化しても
人と人のつながりは
変わってほしくないと
願いたいものです。
(ナント)はこれから
人と人のつながりを大切に
地域の皆さまとともに
歩んでいきたいと思えます。



NANTO 南都銀行
南宮崎駅前7-5 TEL 0742-22-1131